



[海の状況 (3/21~4/20)]

神子表面水温……期間全体をとおして、かなり高め(平年より1.0~1.5℃程度高め)からはなはだ高め(平年より2.0℃程度高め)で推移した(図1)。

米ノ表面水温……期間の中頃までは、やや高め(平年より0.5~1.0℃程度高め)、以降は平年並み(平年より±0.5℃程度)で推移した。(図2)。

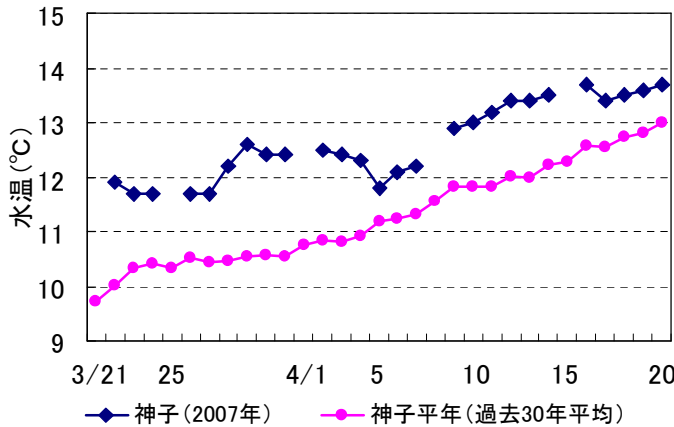


図1 若狭町神子地先における表面水温の推移

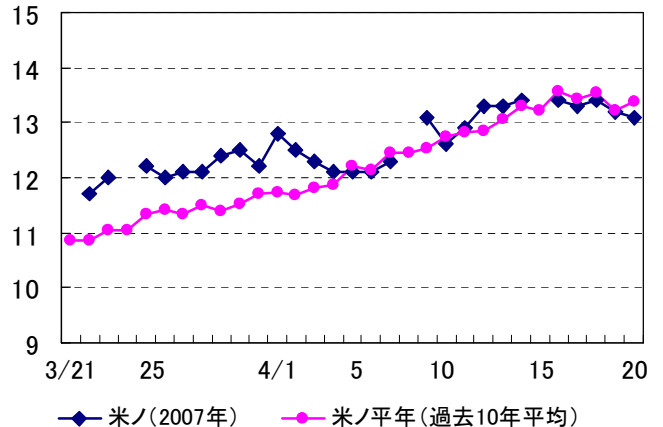


図2 越前町米ノ地先における表面水温の推移

100m深水温……若狭湾沿岸域には12~13℃台の水域が広がっていた。

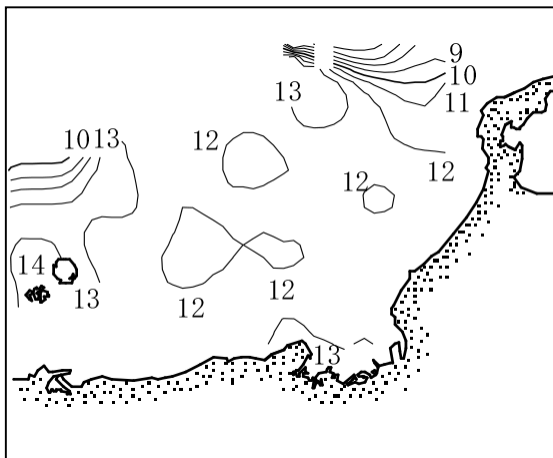


図3 2007年4月上旬の100m深水温

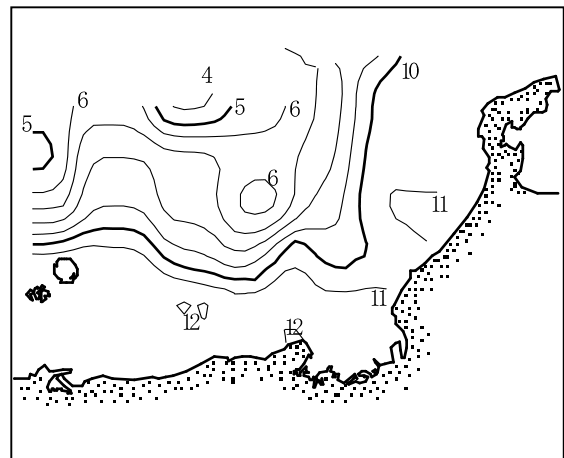


図4 2006年4月上旬の100m深水温

平成19年度第1回日本海海況予報

日本海区水産研究所が、平成19年4月から6月までの日本海海況予報を発表しましたので、関係部分を紹介し

す。
○山陰若狭沖冷水は、2月まで規模は大きく接岸していたが、3月になると規模は小さく平年並みの接岸状況とな

った。今後の張り出しは“やや弱め”で経過するでしょう。
○対馬暖流域の表面水温は、2月まではほぼ全域で“平年並み”~“やや高め”、3月になるとほぼ全域で“やや

高め”~“かなり高め”で推移した。今後も“やや高め”で経過するでしょう。
○対馬暖流域の50m深水温は、1~3月平均は“かなり高め”で推移した。今後は“やや高め”で経過するでしょ

う。
(松宮 由太佳)

〔漁の様相〕

2007年3月の県内の総水揚量は815tで、2006年同月を56t上回った。ハタハタ(2007年;16t, 2006年;84t、以下同じ)、その他カレイ(43t, 60t)、スルメイカ(1t, 12t)、ミズガニ(38t, 62t)等は下回ったものの、アジ類(48t, 21t)、サワラ(101t, 29t)、ヤリイカ(18t, 2t)、アカガレイ(178t, 163t)、ホタルイカ(131t, 82t)等は上回った。

漁業種類別の状況

定置網 ……スズキ等は下回ったものの、アジ類、サバ類、サワラ、ヤリイカ等は上回り、全体で前年を121t上回った。

底びき網 ……アカガレイ、ホタルイカ等は上回ったものの、ハタハタ、ミズガニ等は下回り、全体で前年を63t下回った。

釣り・他 ……キダイ、スズキ、アナゴ、ヤリイカ、タコ類等は上回ったものの、アジ類、サバ類、サワラ、その他カレイ、その他エビ等は下回り、全体では前年並みの漁獲となった。

〔県内主要漁業の3月の漁獲量〕

(調査対象市場：三国・越廼・敦賀・早瀬・小浜の各漁連支所、福井市・越前町・若狭高浜の各漁協)

(単位:kg)

定置網			
魚種	2007年	2006年	97-06平均
カタクチイワシ	1,491	306	11,411
アジ類	47,647	17,169	31,638
サバ類	10,110	4,131	3,223
マグロ類	285	294	87
ブリ類	6,788	140	2,992
サワラ	100,485	24,740	7,814
サケ、マス	1,308	1,237	1,518
マダイ	1,716	164	253
スズキ	6,518	11,151	5,174
ヒラメ	438	265	331
その他カレイ	534	474	337
カマス	517	0	3
フグ類	3,438	2,131	1,943
メバル類	750	906	501
スルメイカ	532	8,241	10,944
ヤリイカ	7,686	779	3,402
コウイカ	674	527	1,392
タコ類	827	721	547
その他	9,047	6,213	10,633
合計	200,792	79,589	94,143

底びき網のつぎ			
魚種	2007年	2006年	97-06平均
ホタルイカ	131,160	82,424	136,503
タコ類	5,407	4,969	7,142
ズワイガニ	16,484	23,115	18,325
水ガニ	37,935	61,951	44,359
アカエビ	21,212	24,191	23,135
その他エビ	4,726	7,891	5,743
その他	24,912	34,266	39,274
合計	470,281	532,871	541,739

釣り、延縄、さし網、その他			
魚種	2007年	2006年	97-06平均
アジ類	543	3,589	1,968
サバ類	1,177	4,848	883
ブリ類	294	348	16,155
サワラ	315	4,631	695
マダイ	2,917	2,946	3,415
キダイ	1,641	644	394
その他タイ	635	989	1,683
アマダイ	2,891	2,398	2,246
スズキ	4,124	3,023	2,045
ヒラメ	6,865	6,176	5,319
その他カレイ	14,015	27,235	14,187
アナゴ	3,321	1,636	4,116
メバル類	6,308	7,404	10,013
スルメイカ	794	3,049	14,086
ヤリイカ	10,107	687	11,156
コウイカ	1,721	1,031	4,562
タコ類	14,998	11,787	17,722
その他エビ	22	8,118	4,659
その他	70,942	56,156	57,466
合計	143,628	146,695	172,770

底びき網			
魚種	2007年	2006年	97-06平均
マダイ	421	734	835
キダイ	563	1,385	1,511
スズキ	537	2,170	2,307
ヒラメ	1,725	3,076	1,884
アカガレイ	177,544	162,991	119,951
その他カレイ	28,641	31,946	36,997
アナゴ	791	2,456	3,589
ハタハタ	15,974	84,164	94,059
メバル類	748	1,177	796
ニギス	524	1,882	1,663
ケンサキイカ	587	1,738	2,467
ヤリイカ	390	347	1,201

総計	2007年	2006年	97-06平均
	814,701	759,155	808,653

〔近府県の漁様相〕

(3月下旬から4月中旬の漁獲状況…1日1隻または1統あたり。京都府の定置網漁獲量は舞鶴漁連への1日あたりの水揚量。)

石川県 …… 定置網 …… カタクチイワシ442kg、アジ72kg、スルメイカ40kg、ブリ18kg

京都府 …… 定置網 …… カタクチイワシ27.0t、マアジ3.6t、サワラ0.7t、ブリ0.7t

兵庫県 …… 定置網 …… アジ738kg、カタクチイワシ574kg、ヤリイカ22kg、マイワシ20kg

鳥取県 …… まき網 …… マアジ23.0t、カタクチ28.6t、マサバ8.5t、マイワシ1.4t

(松宮 由太佳)

2006 年度(H18)漁期における「越前がに」(ズワイガニ)の漁獲量について

3月20日に漁期が終了した「越前がに」の漁獲量は、福井県機船底曳網漁業協同組合の集計によると、前漁期の589トンを超えて595トン(1%増)となりました(表1)。漁獲量が最低であったS54年度以降では、600tを超えたH13、H14年度漁期に次ぐ漁獲量となり、漁業者が実践している資源管理の成果と考えられました(図1)。

表1 銘柄別の漁獲量

操業月	月別漁獲量 (トン)				前年比			
	カニ計	ズワイ	ミズガニ	セイコ	カニ計	ズワイ	ミズガニ	セイコ
H18年11月	190	56	-	133	0.95	0.82	-	1.01
H18年12月	129	49	30	51	1.74	2.87	0.91	2.05
H19年 1月	114	36	69	9	0.85	1.01	0.77	0.98
H19年 2月	108	37	71	-	1.13	1.17	1.11	-
H19年 3月	54	16	38	-	0.64	0.71	0.62	-
漁期計	595	194	208	193	1.01	1.11	0.84	1.17

銘柄別では、ズワイ(雄の堅ガニ)が194トン(前漁期175トンの11%増)、ミズガニ(脱皮後間もない雄ガニ)が208トン(前漁期248トンの16%減)で、雄ガニとしては402トン(前漁期423トンの5%減)でした。また、セイコ(雌ガニ)は193トン(前漁期166トンの17%増)と集計のあるS39年度以降では、S39、S43年度漁期に次ぐ3番目の量でした。

操業状況は漁期を通してほぼ順調に出漁することができ、延べ操業日数は荒天のため12月に操業日数が少なかった前漁期をやや上回る4,509日でした(表2)。

ズワイの漁獲量増加の要因の一つとしては、ミズガニの甲幅10cm以下採捕禁止(従来は9cm以下採捕禁止:過去のデータから9~10cmの小型個体の漁獲量はミズガニ全体の約2割)の自主規制が前々漁期から実施されており、その保護されたミズガニがズワイとして漁獲対象となったと考えられました。また、セイコの漁獲量増加の要因の一つとしては、前年度に加入した卓越年級群(他の年に比べて特に多い加入量を持つ年級群)の取り残しであったと考えられました。

CPUE(1日1隻当たり漁獲量)は132.0kg(前漁期135.2kgの2%減)でした。銘柄別では、ズワイが43.0kg(前漁期40.2kgの7%増)、ミズガニが73.9kg(前漁期82.0kgの10%減)、セイコが84.0kg(前漁期85.1kgの1%減)となり、漁獲量と同様にミズガニで低い値となりました。

(家接直人)

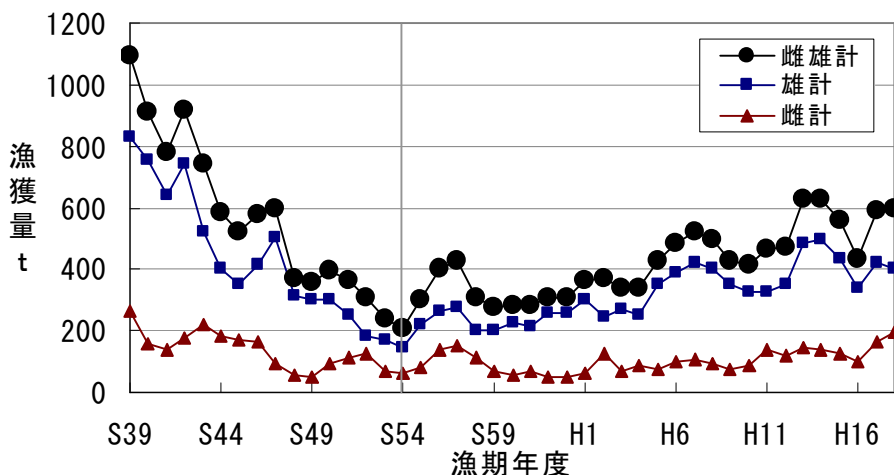


図1 ズワイガニ漁獲量の経年変化

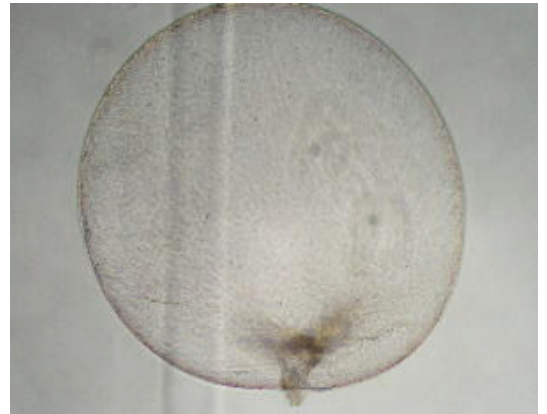
表2 延べ操業日数

操業月	延べ操業日数	前年比
H18年11月	1,012	0.94
H18年12月	1,034	1.54
H19年 1月	864	0.90
H19年 2月	939	1.09
H19年 3月	660	0.84
漁期計	4,509	1.04

「春のおとずれを告げる赤潮」

桜も散りすっかり春らしくなりました。海ではサヨリ漁がシーズンとなり昨年に比べて好調の出だしと聞いています。いつも今頃になると、沿岸の至る所でトマトケチャップのような赤色に染まった赤潮が話題となります。一般に、「赤潮」とは植物プランクトンが大量に増えて海水の色が変わることを言います。赤潮の色は、赤潮の原因となるプランクトンの種類や密度によって変わります。今、見られる赤潮は、子供の頃に手の平にとって観察すると粒々の卵のような形をしているので「イワシの卵？」と先輩から教えられていました。これは、夜光虫(ノクチルカ シンチランス)というプランクトンが大量発生することによるもので、一見異様な感じがしますが海で春の訪れを告げるひとつではないでしょうか。今年は暖冬のためか大規模な発生となっているようで新聞等を賑わせています。赤潮が発生すると一般県民の方や報道機関からの問い合わせがありますのでご紹介します。

この赤潮は、ノクチルカ シンチランス(*Noctiluca scintillans*)というプランクトンで一般的に「夜光虫」と呼ばれています。大きさは、球径 0.15~2mm ほどで風船のような形をしており、分類上は植物プランクトンの渦鞭毛藻類に分類されています。体色は淡紅色ですが、名前のおり夜に刺激をあたえると青白く発光します。夜、船の航跡が青白く発光したり、波打ち際が青白く発光するため容易に観察することができます。普通、植物プランクトンは光合成をして細胞分裂(2分裂)によって増殖しますが、夜光虫は光合成はせず珪藻や渦鞭毛藻類などの植物プランクトンや原生動物などを食べて生活しています。中には小魚を体内に取り込んでいる夜光虫も観察されています。



夜光虫の顕微鏡写真 倍率:×40
(鹿児島水試;赤潮情報から)

春から夏の水温上昇期に、水温や塩分、栄養分等の環境条件が合うと大量発生し、風や潮流の集積作用によって赤色からオレンジ色の鮮やかな色彩の赤潮を形成します。

夜光虫の赤潮は、古くから発生しており水質の悪化等を直接反映するものではなく、また毒性もありません。この赤潮による漁業被害は聞いていませんが、発生がちょうど「ワカメ採り」の時期と重なるため漁業者からは海中が懸濁してワカメが見つけにくいという話がよく聞かれます。

発生場所が養殖場や漁港、岩場の潮だまり等の閉鎖的な所では夜光虫の死骸から大量のアンモニアが出て魚介類のへい死を引き起こすことがあるので、魚介類の蓄養は避けることが懸命です。

夜光虫の赤潮は鮮やかな赤色からオレンジ色になりますが、その他の種類のプランクトンは赤茶色からこげ茶色などに変わります。いままでに見たことのない色の赤潮が発生していたら要注意です。水産試験場まで連絡をお願いします。その時海水の採集をしておいていただければ有り難いのですが。

(川代 雅和)